東の国の博士たち

マタイ２：１－１２

司祭　ヨハネ 井田　泉

2011 年 12 月 24 日
降誕日前夕

京都聖三一教会にて

先ほど聖歌第 94 番「まきびと羊を」という歌を歌いました。これは元々、イギリスの“The First Noel”（最初のクリスマス）という題のクリスマス・キャロルです。この歌は「まきびと羊を」という歌い出しから、羊飼いの歌という印象が強いのですが、歌詞を確かめてみると、2 節から終わりの 4 節までずっと、羊飼いではなく、東の国の博士たちのことが歌われています。

♪仰げば　み空に　きらめくあかぼし

――天を仰いでみると、明るい星がきらめいている。その星は夜も昼ともずっと、輝き渡っている。

その星を道しるべに、3 人の博士たちが救い主を尋ねてはるばる旅をしてきた。

不思議な光の導きによって、博士たちはまぶね、飼い葉桶の中の主イエスさまに出会いました。

それはおそらく、昔のペルシャ、あるいはバビロニアの人たちです。今のイラン、イラクあたりでしょうか。その東の国の博士たちとは、どういう人たちだったのでしょうか。

第1に、この人たちは星を見て、ほんとうの救い主を求めてはるばる旅をしてきた人たちです。昔のペルシヤあるいはバビロニア、今のイラン、イラクあたりから、何十日もかけて遠い道を旅してきました。町にいれば、暖かい家と便利な生活があったのに、偉い先生として町中の皆から尊敬を受けて大事にされていたのに、それをおいて、生きて帰れるかどうかもわからな

い危険な旅に出ました。途中でオオカミにやられるかもしれない。強盗に襲われるかもしれない。砂漠で道に迷うかもしれない。それでも旅に出発しました。なぜでしょうか。どうしても救い主に会いたかったからです。どんなに危険でも、どんなにおそろしい目にあっても、たとえ死んでもよいから、救い主に会いたかった。拝みたかった。それが博士たちです。

第2に、博士たちは諦めなかった人たちです。遠い遠い道。星の光る西の国ということしかわからない。途中で何度も何度も道に迷って、もうだめかもしれないと思ったかもしれません。食べ物がなくなってきたり、水がなくなったり、大雨が降ったり、嵐になったりしたかもしれない。けれども諦めなかった。星だけを頼りに、辛抱して進んだ。空が曇っていれば星は見えなくなります。星が見えることを心から願って旅を続けます。

やっとのことでユダヤの王さまの宮殿にたどり着きました。しかしそこには探し求めている救い主はおられなかった。聖書を調べた人が、それはベツレヘムだと教えてくれた。もう一度出発すると、あの星が輝いて導いてくれた。博士たちは、希望をもって諦めなかった人たちです。

そして第3に、博士たちは救い主イエスさまを見た人、神の子イエスさまと出会った人たちです。イエスさまを見たとき、うれしかった。心に暖かい灯(ひ)がともった。今までのどんな時よりどんなことよりうれしかった。イエスさまに会えたことが最高

の喜び、生涯の喜びです。イエスさまが心に宿ってくださって力を与えられました。これからしっかり生きていけます。

　このように博士たちは、救い主を求めて旅をした人、諦めなかった人、そして救い主イエスさまに出会ってとてもうれしかった人たちでした。

　けれどもそれだけではありません。実は、救い主イエスさまのほうが、博士たちを待っておられた。招いておられた。星の光で導いておられのです。
　イエスさまはわたしたちにも出会いたいと待っておられます。わたしたちのことも、イエスさまは招いておられます。
　最初のクリスマスに、博士たちは救い主イエスさまに会うために遠い旅をしました。けれども旅をしたのは、博士たちだけではありません。実はイエスさまご自身がもっと遠い旅をしてこられました。神さまのところから人間のところまで。天国から、ベツレヘムの飼い葉桶まで遠い旅をして、ここに来られたのです。
　わたしたちがあの博士たちのように救い主にお会いすることを願うなら、すでにイエスさまはここにいて、わたしたちに出会ってくださいます。わたしたちの心に宿ってくださいます。

♪くすしき光の　導きによりて
　博士はまぶねの　主イエスにまみえぬ